


星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2026年1月15日
氏名	北川 秀朗
指導教員名	中谷 直史
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	
学会等開催日：	2025年12月4日～2025年12月6日
学会等名称：	JAPAN PAIN WEEK
学会等開催場所：	東京ビッグサイト
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	第二次産業労働者が有する痛みの特徴 －急性疼痛と慢性疼痛の比較－
発表者名（全員記載）：	北川秀朗、坂野裕洋、豊田慎一、中谷直史
研究概要 (150字程度)	本研究は、愛知県の第二次産業労働者を対象に、痛みの期間により急性疼痛群と慢性疼痛群を比較し、痛み・心理・職業要因の特徴を横断的に検討した。その結果、慢性疼痛には疼痛強度と自己効力感が独立して関連し、慢性疼痛労働者は労働に対する自己評価が高い傾向を示した。本邦特有の就労文化を踏まえた企業・専門職による支援の必要性が示唆された。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	本発表を通じて、疼痛を生物学的側面だけでなく、心理・社会・文化的背景を含めて捉える重要性を再認識した。学会での質疑応答は、研究の臨床的意義と今後の縦断研究の必要性を明確にする貴重な機会となった。
写真添付欄 2枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年10月31日
氏名	三田 琢磨
指導教員名	越智 亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	※いずれかにチェック
学会等開催日：	2025年10月23日～2025年10月25日
学会等名称：	第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会
学会等開催場所：	旭川市民文化会館・アートホテル旭川
研究・講演タイトル：	G.A.I.T.を用いた脳卒中患者の歩行分析における検査者間信頼性と妥当性の検証～若年理学療法士による分析～
発表者名（全員記載）：	三田 琢磨, 越智 亮
研究概要 (150字程度)	本研究は、歩行観察評価表であるG.A.I.T.を用いた歩行分析について、若年理学療法の脳卒中患者を対象とした歩行採点の信頼性と、三次元動作解析の結果との一致度を検証した。若年理学療法士の歩行の採点の信頼性と三次元動作解析の結果との一致度は低い結果であった。また観察対象の関節別の比較では股関節での一致度が特に低い結果であった。
感想その他 アピール欄 (100字程度)	発表を通して、若年理学療法士の歩行分析精度の検証に関して、多くのご指摘やご助言をいただきました。今後の大学院での主研究に向けて、これらの意見を参考にしながら、さらに研究を発展させていきたいと考えています。
写真添付欄 2枚以内	


星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年10月29日		
氏名	平岡 大輝	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）			
学会等開催日：	2025年10月23日～2025年10月25日		
学会等名称：	第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会		
学会等開催場所：	北海道旭川市		
国名，都市名，会場名	旭川市民文化会館・アートホテル旭川		
研究・講演タイトル：	高回転ペダリング運動が筋機能と血糖値に及ぼす影響：健常者への前後比較試験による予備的研究		
発表者名（全員記載）：	平岡大輝，越智亮 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線		
研究概要 (150字程度)	自転車エルゴメーターを使用した高強度レジスタンストレーニングとして，高回転ペダリングの単回運動前後の筋および代謝応答を高抵抗ペダリングと比較し，糖尿病患者への実用性の検証を目的としたパイロット研究である．結果，高回転ペダリングは少ない外的仕事量で高抵抗ペダリングと同等の筋腫脹と筋疲労，血糖降下作用を認めた．		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	本研究の結果より，高回転ペダリングが糖尿病患者への適応に有用となる可能性を示した．学会発表を通じて，本トレーニングを患者に適応する際の，患者の選定基準とリスク管理に関する意見をいただき，今後の研究への汎化を検討していく．		
写真添付欄 2枚以内	 		

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025/10/12
氏名	判治真也（研究員）
指導教員名	越智亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）	
学会等開催日：	2025 年 10 月 4 日 ～ 2025 年 10 月 5 日
学会等名称：	第 12 回転倒予防学会
学会等開催場所：	G メッセ群馬
国名，都市名，会場名	
研究・講演タイトル：	後方への転倒回避テップにおける一歩長の制約が下肢筋活動量に与える影響
発表者名（全員記載）：	判治真也，高橋 樹，石畑遥菜，古久根祐大，越智 亮
研究概要 (150 字程度)	易転倒高齢者は，一歩長が短く，体幹がより後傾した姿勢で着地するため，転倒に至りやすい．一歩長を制限した後方ステップ動作の下肢筋活動を調査した．虚弱高齢者の後方ステップを再現した 1 歩長の 30%条件において，着地姿勢の安定性が減少し，膝伸展筋のより大きな筋活動が観察された．膝伸展筋力を維持・増強することが重要であることが示唆された．
感想その他 アピール欄 (100 字程度)	今後は n 数を増やして，研究を継続していきたいと思ひます．
写真添付欄 2 枚以内	

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2025年8月27日
氏名	野田 篤志
指導教員名	越智 亮
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など
論文採択・掲載日	2025年8月25日
論文掲載雑誌名 巻・号・年	Journal of Exercise Rehabilitation. 21(4); 210-218, 2025.
doi	https://doi.org/10.12965/jer.2550446.223
タイトル	Effects of modified sit-to-stand training on load asymmetry in patients with hip fracture: a pilot quasi-randomized controlled trial
発表者名（全員記載）	野田 篤志, 越智 亮
要旨 (250字程度)	<p>本研究は、座面を高く患側足部を後方に位置させた改良型起立トレーニングが大股骨近位部骨折患者の起立時と歩行時の荷重非対称性を改善させるかを検証した。対象は改良型起立トレーニングを実施する改良型起立群 12 名と患側と健側足部を同位置とした起立トレーニングを行う通常起立群 10 名とした。介入期間は両群ともに 1 日 15 分、2 週間とした。改良型起立群は通常起立群と比べ、起立時の患側下肢荷重量、歩行時の患側下肢立脚時間、患側膝関節伸展筋力およびバランス機能の改善を認めた。改良型起立トレーニングは、大股骨近位部骨折患者の起立時や歩行時における患側下肢の荷重不全、左右下肢の荷重非対称性を、2 週間という比較的短い期間で改善させる効果的な介入である可能性を示唆している。</p>
	

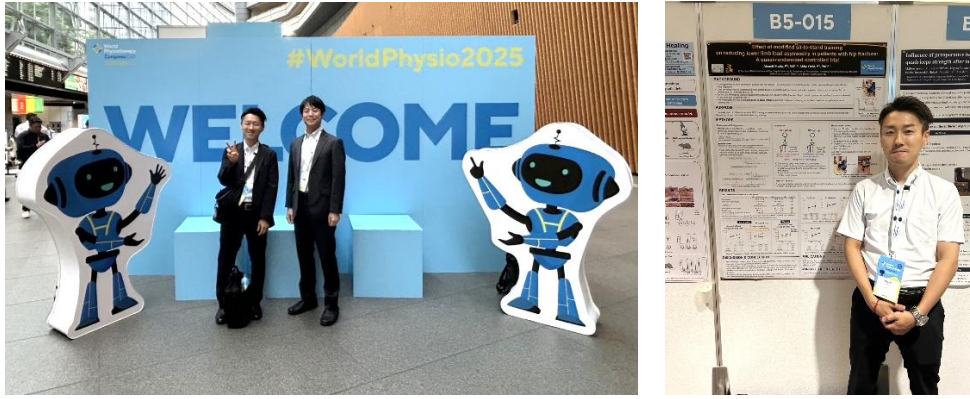
星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	令和7年7月3日
氏名	大井慶太
指導教員名	山田 和政
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 研究論文採択 <input type="checkbox"/> 総説論文掲載 <input type="checkbox"/> その他紀要など
論文採択・掲載日	2025年6月20日
論文掲載雑誌名	理学療法科学 40・3・2025
卷・号・年	
doi	https://www.jstage.jst.go.jp/browse/rika/list/-char/ja
タイトル	寄り添いロボット®の使用が最大重心移動距離と姿勢安定度評価指標、主観的安定感に与える影響
発表者名（全員記載）	大井 慶太, 佐藤 隼, 山田 和政
要旨 (250字程度)	寄り添いロボット®の使用が、最大重心移動距離と主観的安定感に与える影響について検討することを目的とした。当院入院・外来患者15名を対象に、重心動揺計を用いて最大重心移動距離、姿勢安定度評価指標（IPS）、下肢荷重率、対象者の主観的安定感について、寄り添いロボット®未使用時と使用時で計測し、それぞれ比較し検証した。寄り添いロボット®使用時で、最大重心移動距離（右と後方）、IPS、下肢荷重率は有意に向上したことから、寄り添いロボット®の使用は、安定性限界域に近い状態までバランス負荷を課すのに有用であることが考えられた。

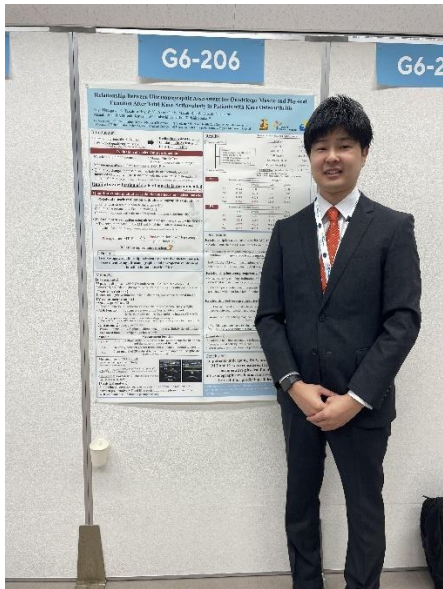
星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年6月6日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）			
学会等開催日：	2025年5月29日～2025年5月31日		
学会等名称：	World Physiotherapy Congress 2025		
学会等開催場所：	東京都 世田谷区 東京国際フォーラム		
研究・講演タイトル：	Effect of standing exercise combined with local vibration stimuli on hypertrophy for disused triceps surae muscle in older adults		
発表者名（全員記載）：	村上 ま比呂, 越智 亮, 林 尊弘		
研究概要 (150字程度)	地域包括ケア病棟に入院中の高齢廃用患者を対象に、振動刺激（以下；LV）を適用し、4週間の立位保持訓練を行った。結果、LVを適用した群において4週間後の下腿三頭筋の筋厚に交互作用を認め、増大を認めた。一方で、LVを適用した群としていない群において、日常生活動作能力に有意差はなく、両群ともに成績が改善した。		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	国境を越えた世界の理学療法士の研究報告を学ぶことができ、とても貴重な時間となりました。苦手な英語での挑戦でしたが、世界中の理学療法士に刺激をもらい、さらなる研究へのモチベーションをあげることができました。		
写真添付欄 2枚以内	 		

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年6月4日		
氏名	野田 篤志	指導教員名	越智 亮
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 <small>※いずれかにチェック</small>		
学会等開催日	2025年	5月	29日～2025年5月31日
学会等名称	World Physiotherapy Congress 2025		
学会等開催場所	東京国際フォーラム <small>国名, 都市名, 会場名</small>		
研究・講演タイトル	Effect of modified sit-to-stand training on reducing lower limb load asymmetry in patients with hip fracture: A quasi-randomized controlled trial		
発表者名（全員記載）	野田 篤志, 越智 亮		
研究概要 (150字程度)	<p>本研究は、座面を高く患側足部を後方に位置させた改良型起立トレーニングが大腿骨近位部骨折患者の荷重非対称性を改善させるかを検証した。2週間の改良型起立トレーニングは通常起立トレーニングと比べ、起立時の患側下肢荷重量と荷重非対称性、患側膝関節伸展筋力およびバランス機能を改善させた。</p>		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	<p>本発表を通して、改良型起立トレーニングに対する本研究の限界点や臨床における実用性について多くの意見を頂けた。今後は本研究結果をまとめ、論文執筆に尽力していきたい。</p>		
写真添付欄 2枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年5月29日		
氏名	長谷川 雄也	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）			
学会等開催日：	2025年5月29日～2025年5月31日		
学会等名称：	World Physiotherapy Congress 2025		
学会等開催場所：	東京都千代田区		
国名，都市名，会場名	東京国際フォーラム		
研究・講演タイトル：	変形性膝関節症患者における大腿四頭筋の筋厚・筋輝度と人工膝関節全置換術後の身体機能との関係		
発表者名（全員記載）：	長谷川 雄也，林 尊弘，越智 亮，加古 誠人，中原 広志，鈴木 篤明，桑原 浩彰，濱田 恭，酒井 忠博		
研究概要 (150字程度)	本研究は，変形性膝関節症と診断され，人工膝関節全置換術施行予定の患者を対象に，術前時における超音波画像診断装置を用いた骨格筋評価と術後3ヶ月時点の身体機能との関連について検討を行った．結果，大腿四頭筋の中でも内側広筋の筋厚は身体機能との関連を認め，筋輝度においては大腿四頭筋の中でも外側広筋で身体機能との間に関連を認めた．		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	初の国際学会への参加で，海外の方々の発表を聴講する中で，各分野の世界の理学療法のトレンドについて学ぶことができた． しかし，英語でのディスカッションはまだまだ不十分であり，研究活動に加え，そのような力も身につけていきたいと感じた．		
写真添付欄 2枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年4月14日（月）		
氏名	内屋 純	指導教員名	林 浩之
掲載内容	<input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック		
学会等開催日	2025	年	4月11日～2025年4月12日
学会等名称	第37回日本ハンドセラピィ学会学術集会		
学会等開催場所	パシフィコ横浜ノース（神奈川県横浜市）		
研究・講演タイトル	術後早期から漸次静的装具を適応した肘関節周囲骨折患者における術後12週以降の拘縮改善効果		
発表者名（全員記載）	内屋純 ¹⁾²⁾ 、林浩之 ¹⁾³⁾ 、榊田臣弘 ²⁾ 、棚橋宏行 ⁴⁾ 、横井達夫 ⁴⁾ 1) 星城大学大学院健康支援学研究科 2) 岐阜県総合医療センター中央リハビリテーション部 3) 星城大学リハビリテーション学部 4) 岐阜県総合医療センター整形外科		
研究概要 （150字程度）	術後早期から漸次静的装具療法を適用した肘関節周囲骨折患者における術後12週以降の肘関節角度を後方視的に調査し、漸次静的装具の拘縮改善としての可能性を探索した。その結果、術後12週以降は肘関節角度の改善の少なく、装具の使用終了時に機能的角度を獲得した割合も低かった。拘縮改善を目的とした漸次静的装具療法は術後12週以降の肘関節角度に変化をもたらさない可能性がある。		
感想その他 アピール欄 （100字程度）	本発表を通じ、肘関節周囲骨折患者に対して術後早期から漸次静的装具を適応した場合、術後12週以降は肘関節角度に変化をもたらさない可能性が示唆された。今回は比較対象がなく、漸次静的装具の特性が否かは確認できていない。今後は大学院での研究である動的装具群や装具未使用群などの対照群を設け、検討することに繋げていく。		
写真添付欄 2枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究所 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025年2月3日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ <input checked="" type="checkbox"/> 学会研究発表 <input type="checkbox"/> 講演講師 <input type="checkbox"/> その他）			
学会等開催日：	2025年2月1日	～	2025年2月2日
学会等名称：	日本物理療法合同学会大会 2025		
学会等開催場所：	愛知県 名古屋市		
国名，都市名，会場名	名古屋市立大学 田辺通りキャンパス		
研究・講演タイトル：	下腿三頭筋廃用性筋萎縮筋に対する局所振動刺激を併用した立位保持運動の効果 ～準ランダム化比較試験～		
発表者名（全員記載）：	村上 ま比呂，越智 亮，林 尊弘，篠崎 裕也，服部 菜恵		
研究概要 (150字程度)	<p>地域包括ケア病棟に入院中の高齢廃用患者を対象に，下腿三頭筋に局所振動刺激（以下；LV）を適用しながら立位保持訓練を行う4週間の介入研究を行った。立位保持のみの群と比べ，LVを適用した群のみ，4週間後に8カ所の腓腹筋筋厚合計値の増大を認めた。筋厚の増加率と足関節底屈筋力の増加率に有意な正の相関関係を認めたため，LV群の筋厚増大は筋肥大である可能性が高いと考えられた。一方，歩行や日常生活動作能力はLV適用群と非適用群ともに改善したが，両群間で改善効果に差はなかった。</p>		
感想その他 アピール欄 (100字程度)	<p>本学会において，同じように振動刺激を用いた物理療法や運動療法の介入研究の報告がみられ，同じ局所振動を用いていても，目的や使用方法などが異なっていた。自身の研究と似ている部分も多くあり，理解しやすく，すぐに臨床で活かせる内容であった。自身の研究においても，研究対象や使用方法を検討することで，より振動刺激を用いた理学療法の発展につながると考えられた。</p>		
写真添付欄 2枚以内			